

首都圏を飛び越える！トンボの冒険



トンボはどこまで飛ぶかフォーラム

2023年度の調査結果ダイジェスト

田口正男（農学博士）：明星大学理工学部環境科学系非常勤講師

ニツ池のウチワヤンマ、首都圏を飛び越える

今回、移動確認は3件と少なかったが、その中身は濃い。2番目はシオカラトンボの報告だ。以前にもあったが、市民、特に子供たちがその記

録に大きく絡んでいることである。調査の性格上、こうしたデータが増えていくことが、20周年を経た本調査にとつて、重要な意味を持つことは明らかであろう。続いて3番目、移動の次は増加だ。増加と言ったら、温暖化の影響を受けて北上を続けるタイワンウチワヤンマをおいて他にない。この種は本調査では、2019年にニツ池で2頭捕獲されて以来、13頭、27頭、30頭、そして本年度には39頭と捕獲され、隣の三ツ池では、2021年より3頭、2022年27頭、そして本年度は44頭とさらにそれを上回る数が捕獲された。北上種問題ともあいまって、すでに生息していたウチワヤンマへの影響が懸念される一方、全国規模のこうした近縁種問題を解く糸口ともなることが期待される。



2023年度調査の1番の注目点は、なんと言つてもニツ池で放したウチワヤンマの移動確認である。8月20日にニツ池で放したオス1頭が8月30日、足立区の舎人公園で写真撮影されたのである。まず、1つ目の驚きとしては、その移動距離だ。この2地点間の直線は32・6kmだ。本調査の過去20年間でも、種を問わずしても、最長はウスバキトンボの6.2kmで、その約5倍はある。それだけではない。ウスバキトンボはもともと移動習性の高い渡りを主としたトンボであるが、それよりもはるかに長い距離であるということである。そして2つ目。それは、この2つの移動池間が直線で結ぶと首都圏をハッキリと横切っているのである。世界でも有数の大都市を活動範囲に取り込んでい

る可能性がある。そして3つ目としては、その2地点間をみると、5〜10kmの間隔で多摩川、皇居、新宿御苑、荒川と言つた大掛かりな水域が点在し、コリドールのようになっていることだ。これが、例えば真西へ同距離飛んだ記録であるのとは、以上のようにさまざまな点で意味合いが異なつてこよう。

今後の動向が気になるという意味では、昨年、臨海部近くの池、ニツ池で初めて捕獲されたマユタアカネ4頭のその後である。幸いにも1頭だけであったが今年度も捕獲され、この種が池周囲に安定した森林環境がある水・池複合生態系の住人(田口、1997)であることから、その増加からは環境の安定的評価を期待できる。また、アカネ属においては、夏の暑さで本調査では減少気味であったが、それほど多くはないリスアカネが各地で安定して出現する傾向が見られ、横浜市を中心都市としたネットワークの構築が期待される。

トピックスベスト④



観音崎自然博物館がフォーラムに仲間入り

11月26日に活動報告会の会場となった観音崎自然博物館がトンボはドコまで飛ぶかフォーラムの参加団体になりました。東京湾に面する横須賀市の博物館が加わったことで、臨海部のトンボの移動や種類、個体数など新たな知見が得られることでしょう。



ジュニア調査員2名新規登録

井上さんと土井さんが新たにジュニア調査員に認定されました。先輩ジュニア調査員の皆さんたちも本調査などで大活躍しました。若い力の成長がフォーラムの活動を推進する大きな力となります。普段からジュニア調査員の活動を支える保護者の皆様ありがとうございます。

自然共生サイト認定推進

令和6年度中の横浜市内17か所の登録申請準備を進めています。



今年の移動トンボ

最長移動 ニツ池で捕獲したウチワヤンマが10日後に東京都足立区舎人公園で観察をされていた渡辺さんによって確認されました。その距離なんと32.6 km。貴重な情報に感謝です！

学校帰りのジュニア調査員稲田さんが通学路で捕食中のシオカラトンボ発見！そっと近づいて捕まえてみるとからニツ池から3.1 kmも飛んできた再捕獲の個体でした。

貨物線の森緑道からJFEトンボみちへ移動してきたショウジョウトンボをジュニア調査員の工藤さんが捕獲しました。



撮影 渡辺 浩氏

